

ふたつのアイデンティティ： 「いまここの」コミュニケーションと認知科学 Two Forms of Identity: "Here and Now" Communication and Cognitive Science

南 保輔[†]

Yasusuke MINAMI

[†] 成城大学

Seijo University

yminami@seijo.ac.jp

Abstract

Utilizing Goffman's treatment of identity, this article first presents interview data of overseas Japanese adolescents as a form of private, social identity and points out one of the basis of identification in interaction. Second it argues interactants obtain public identity of each other at onset. Finally, current and potential connections between identity studies and cognitive science are discussed.

Keywords — Social-Personal Identity, Private-Public Identity, here and now, Interaction, Interview, Cognitive Science

1. はじめに

南は、「相互行為」を「いまここのコミュニケーション」というかたちで理解しようとしている。これまで、海外帰国子女の文化的アイデンティティについて研究してきた。本発表では、アイデンティティ研究を、「いまここのコミュニケーション」とどう結びつけられるかを検討し、認知科学との結びつきを探りたい。

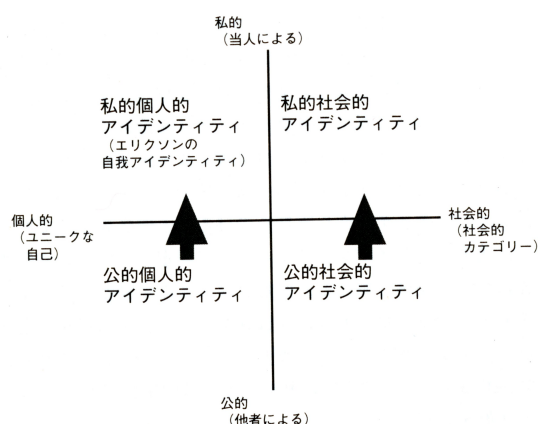


図1. アイデンティティの4類型
(註：矢印は役割取得を表す)

2. 2つのアイデンティティ

Goffman の整理[1]にそって2つのアイデンティティ

ィを分ける。それは、「同定 (identify)」する主体に基づく、「あのひとは何者か」という他者視点の「公的 (public)アイデンティティ」と、「わたしは何者か」という本人視点の「私的 (private)アイデンティティ」である[2]。図1は、同定する対象（社会的カテゴリーか本人の個人誌か）をもうひとつの分類軸として、アイデンティティの4類型を考えている。

3. 海外子女のアイデンティティ

私的アイデンティティの例として、海外子女のアイデンティティを考える。海外で成長する「日本人」子女にとって自身が「何人」であるかということは大きな関心事である[3]。日本生まれの日本人の両親を持ちアメリカで生まれ育った16歳の高校3年生のAさん（女性）は、その母親も同席するインタビューで「何人」かと問われて、「いまわからない」と回答した（抜粋1；調査については、[3]を参照）。

抜粋1 Aと母親とのインタビュー①¹

南：いま、あのう、ご自身としては：ん、ん、何人だというふうに

A：それがいまわからないんですね：

南：あ：：

A：あのう、まえは、にほん、あのアメリカに住んでる日本人として、ま、ま：そうなんですけど

南：ん：

A：やっぱり：家では日本のカルチャー

南：はいはい。

A：で：外ではアメリカのカルチャーだから：

南：はい。

A：どっちなのかな：と思って：

¹ トランスクリプト記号は以下のとおりである。「言葉：：」は音の引き延ばし、(〇)内は動きを含む作成者による注記を示す。

Aさんはアメリカ生まれでアメリカ国籍を持っている。「何人」と聞かれたときに問題となるのは、国籍ではなく「カルチャー（文化）」である。

そして、ここで話題となっているアイデンティティは、「私的社会的アイデンティティ」である。「わたし自身」を「日本文化」と結びつけて同定するものだからだ。このような「社会的アイデンティティ」に利用される社会的カテゴリーには、国籍や文化、性別などのほかに、「まじめな学生」といった社会的タイプのようなものもある。

文化的アイデンティティの判断根拠としては、文化的遺産（先祖の出自）と、だれかと比較しての異同判断がある。

抜粋2 Aと母親とのインタビュー②

A：で、アメリカ人としても、やっぱり、日本人がすごく強くて、

南：うん、うん。

A：あの、ずっと、まあ、親も、おじいちゃんも、ひいおじいちゃんも、みんな日本人だからあ。あのう、ま、日本人なんだけとお。

母：《むつみのほうを向く》

A：なんか、やっぱりいま、日本に住んでる、

南：うん、うん。

A：わたしとおなじ、年としては、あんまり日本人っていうかんじじゃないから。

南：うん。

A：ほんと、どうなのかなあって、

母：ふふふ《小さく3回うなづく》

A：《母親のほうを向いて》さいきんの、

母：《むつみを見て2回うなづく》うーん、ここ数ヶ月すごく、

《両手を上下に動かしながら》こうやっぱり、《むつみを向いて、うなづきあう》

南：うん。

母：アイデンティティを、

南：はい、はあはあはあ。

A：《調査者に向かって》そうですね。

母：あの、探っているかんじがしますね。

A：うん。アメリカに、あの、アメリカの学校。

南：はい。

A：いまの学校行ってても。あの、やっぱり、みんなとちがうなあって、

南：うん。

比較の対象は、「いま、日本に住んでる」同年齢のひとたちと、アメリカで通っている高校の同級生とである。Aは、前者の日本人高校生ほどは「日本人」らしくないし、アメリカ人高校生の「みんなとちがう」と感じるのである²。

4. 私的アイデンティティと相互行為基盤

私的アイデンティティとは、「わたしは何者か」という本人の考えであり、これにアクセスするには上例のようなインタビューが便利な方法である。

私的な社会的アイデンティティは、他者との比較に基づく異同判断だと前節で述べたが、その異同判断の際に参照されるのは、相互行為場面でのふるまいであることが多い。

抜粋3 Aと母親とのインタビュー③

A：けっこう思いますね。だから話すこととか。

南：はい。

《犬が出てきて少し中断される》

南：それはやっぱり、いま、ここいちに、1年ぐらい、ちょっと気になってきた。

A：そうですね。まえはそんなに考えなかったんですけど、さいきん、はい、考え出しましたね。

南：ふーん。

A：でなんか、日本の音楽もよく聴くようになったし。

南：はい、ああ。

A：日本のテレビももっとよく見るようになったし。

南：はいはいはい。

抜粋3は抜粋2の続きである。「みんなとちがう」のは「話すこととか」である。つまり、話題が合わないというのである。

その話題とは、聞く音楽や見るテレビ番組である。Aが日本の音楽を聴き、日本のテレビ番組を見るようになって、アメリカ人の同級生と話題が合わなくなったということである。

青年期の若者にとっては、仲間と楽しく時を過ごせるというのはたいせつなことだ。典型的なアメリカ人は「ワイルドなこと」をするので、「おつきあい」がむ

² 本論においては取り上げられないが、C. H. CooleyやG. H. Meadらの論じた他者の視点・役割取得というメカニズムが作動していることは想定される。

ずかしいとAは話してくれた[3]. テーマパークに遊びに行き、朝3時までいるというようなことをする. アジア系の親はそのようなことを認めないので、結果としてアジア系同士で友だちになることが多いというのである.

このインタビューの語りからうかがわれるのは、「いまここの」相互行為をともに行うことができるかが、「友だち」という関係でいられるかを左右するということである. つまり、アイデンティティの相互行為基盤がわかるのだ.

友だちづくりは青年期の若者にとって重大な関心である. これがうまくいかず「日本に帰りたい」と言い出した日本人子女もいる. 抜粋4は、Bさん（女性）とその母親とのインタビューからのものである.

抜粋4 Bと母親とのインタビュー³

- 01 B : ん : (.) でもむかし (は) わたし日本に帰りたいかつ
 02 たよね : [高校時代
 03 母 : [ん : 高校時代 ()
 04 B : え
 05 母 : 高校 [2年ぐらいまで
 06 B : [中高ぐらいで
 07 南 : ん :
 08 母 : えと
 09 B : あたしは日本に帰るとか (.) しか毎日行ってなくて
 10 南 : あほんと : hhh
 11 母 : ん :
 12 B : でそれで部活とかには行って
 13 南 : ん
 14 B : 友だちが増えて
 15 南 : ん :
 16 B : (.) ん (.) なんか変わったよね : [: :
 17 母 : [(なんか) 急に
 18 [変わった () ね
 19 B : [急に変わ [った
 20 南 : [ふ : ん
 21 母 : 最後の1年で急に変わったも [んね :
 22 B : [ん : [ん
 23 南 : [ふ : ん

³ 注1以外のトランスクリプト記号は以下のとおりである.
 「(.)」は短い無音区間, 「[」, 「]」は重なり開始/終了地点, 「=」は2つの発話の密着, 「h」は呼吸音, 「(言葉)」は聞き取りが確定できない発話, 「()」は聞き取り不能な発話, 「言葉」は強勢を示す.

- 24 B : 急に変わっちゃって
 25 母 : ふ : ん
 26 B : (.) でも変わってよかったと思ってる
 27 南 : ふ : : ん
 28 B : だってみんな日本に行く子は帰ってきたいとか
 29 ゆうしね
 30 南 : あ : : :
 31 B : タモとか hhhh
 32 母 : あみんなそうなんですよ
 33 南 : ん : ん
 34 母 : 日本に帰ってきた (.) かたたちも
 35 南 : ん :
 36 母 : けっきょくやっぱり (.) なんかこうイメーエがいて
 37 たイメージとちょっと [ちが [ってね
 38 南 : [ふ : : : ん
 39 B : [あはははは
 40 母 : 日本が (.) やっぱ暮らしにくくて
 41 南 : ふ : : [: ん
 42 母 : [ふ : : ん
 43 B : ん :
 44 南 : でも《次のトピックへ》

Bは、日本で生まれて5歳のときに渡米した. このインタビューの時点ではアメリカの小学校から中学、高校を経て大学に入学して1年の学生生活が終わったところである.

インタビューでは、文化的アイデンティティの側面を調べるために言語使用の状況などをたずねていた. 計算のときに使うのは日本語か英語かといった話題が一区切りしたところで、Bが自発的に話したのが、上の抜粋4の01-02行である.

Bは、中学生や高校生のころに、「日本に帰る」と毎日のように母親に訴えていた(06, 09行). それが、高校の最上級生のころに言わなくなった. 現地の高校で部活動に参加し友だちができたからだと言う.

私的アイデンティティは、E. H. Eriksonの言う「エゴアイデンティティ」とほぼ重なる[4]. 青年期に確立されたアイデンティティは、その後の生き方を大きく左右する. 上のBの場合は、万一Bの家族がBの願いを受け入れて高校時代に日本に帰国していたら、その後の人生航路はかなり変わったものとなっていたであろう.

先のAは、抜粋3の続きの抜粋5で、そのような予期的な思考、将来展望をしたことを述べている.

抜粋5 Aと母親とのインタビュー④

A：はい。将来のこと考えてたら、ずうっとアメリカに生きていったら、やっぱり子どももアメリカ人として生まれて、

南：はい。

A：その子どももきっとアメリカ人と生まれて、

南：はいはいはい。

A：で、そのうちあんまり、日本人っていうのが、ひびいてこないのかなって

南：はいはいはい。

A：思ったりして。

南：はいはいはいはい。

Erikson は、人生段階の青年期にアイデンティティの確立が課題となるとしたが[5]、Aはそのプロセスの渦中にあり、Bの語りはそういった時期を経た後の振り返りである。心地よく相互行為を行っていけるところをひとは選んでいくという南の知見[6]の事例となっている。

5. インタビューの連鎖分析

ここまでの議論では、相互行為「について」語られたデータを利用してきた。社会調査の方法としてのインタビューは、社会生活そのものというよりも、社会生活「について」のものとなりがちである。

会話分析の方法のひとつに連鎖分析⁴がある。これをインタビューに適用することで見えてくるものがある。抜粋4を提示されて、Douglas Maynard 博士はBと母親とのリズムの良いやりとりを見いだした。「日本に帰りたい」と毎日のように言っていたこと、それが中学高校時代だったこと、そして、「高校2年生」をすぎて「急に」変わったことなど、Bと母親とが共同して発話を構築している。だからこそ、「変わってよかった」というBの発話にたいしての母親の同意の不在が顕著となる。Bの発話を、インタビュアーである南が受けとめることになっている（27行）。

日本語を理解しない Maynard 博士がこのことを指

摘しえたということは、連鎖分析の有効性をよく示している。ただし、このインタビューのデータは音声記録のみであるため、Bの発話がだれに宛てられたものかの特定は困難だ。

Aとのインタビューは、録画記録もあり、Aが母親の同意を求めて視線を向けるというところがはっきりと確認できる。抜粋2で「さいきんの」と言いかけてAは母親に視線を向ける。そこで、母親は「うーん、ここ数ヶ月すごく、こうやっぱり、アイデンティティを、あの、探っているかんじがしますね」と言う。この発話の途中で、Aと母親は顔を見合わせてうなずきあい、Aは「そうですね」と同意発話をしている。母親から「アイデンティティ」ということばが出ていることにも注意したい。

Bの母親にはこのインタビューの後数年してこのときのことを確認する機会があった。この場面を記憶していたわけではないが、娘のBがアメリカで生きていくことになっていることについて、アンビヴァレントな想いを持っていることが感じられた。つまり、「変わってよかった」と母親として感じているわけではなかったということである[7]。

インタビューをいまこのコミュニケーション、相互行為として捉えて分析することで、Bの母親のアンビヴァレンスに気づくことができた。娘の生き方についての母親の評価は、その後の機会に直接インタビューすることでその一端を引き出すことがなされた。

6. いまこの公的アイデンティティ

本人視点の私的アイデンティティは、インタビューで引き出されるのにたいして、他者視点の公的アイデンティティは、相互行為場面のほかの参与者による同定に関わっている。

公的アイデンティティは、社会的カテゴリーを同定する社会的アイデンティティと、あるひとをその個人誌と結びつける個人的アイデンティティとを分けることができる[1]（図1）。これらの例として、NHKドラマ『てるてる家族』の一場面を取り上げる⁵。

抜粋6 春男とデービッドの初対面場面

《工場の外の光景》

⁵ 場面は昭和22年、復員後パン職人になることにした春男は、米軍基地のパン工場で働いている叔父の文治を頼って佐世保までやってきた。その初日である。なお、ナレーションは後に生まれることになる春男の四女冬子が務めている。

⁴ 「連鎖分析」にあたる英語は、「sequential analysis」と「sequence analysis」の2つの表現がある。Schegloffの隣接対（adjacency pair）は前者の代表とされている。本論では、行為の連鎖（関係）に着目する分析といったやや広い理解でこのことばを使っている。そのポイントは、発話・行為の受け手による先行当該発話・行為の理解に定位するという点である。

冬：これは、アメリカ海軍の基地のなかにあるパン工場（こうば）です。

《工場内の光景》

冬：佐世保に着いた翌日から、おとうちゃんはここで働きはじめました。

文：ここやねん。

《文治と春男が映る》

文：わりとこぢんまりとしてるやろ。

《文治と春男がアップ；春男はきょろきょろしている》

文：ここは菓子パンとケーキつくってんねや。何万人もいてるアメリカ兵たちの主食になる食パンは、別のおきな工場（こうじょう）でつくってんねやで：。

《春男の胸を右手で軽くさわりながら》

文：おいおい。

《デービッドがやってくる》

文：ここの責任者のデービッドはんや。

《デービッドのアップ。そして、春男のアップ。また、デービッド》

デ：ミスター春男やな。

《さらに春男に近づいて》

デ：まいど。はじめまして。ナイストゥーミートユー。

《両手を広げて歓迎のポーズ。握手する。春男はあっけにとられている》

春：は：＝

デ：＝Nice to meet you.

春：ど：もど：も。《握手をしながらお辞儀をする》

春：ナイ，nice to meet you.

《かたわらの文治が顔をよせて言い聞かせるように》

文：デービッドはんはなあ、ケーキ職人の神様や。

《春男を向いて、やや得意げに》

文：ま、大阪弁は、わしがおしえてまんねけどな。

《背中越したったデービッドがアップになる。やや言いにくそうに言う》

デ：よろしゅう，たのんまっせ。

初対面の春男にとっては、この人物の「アメリカ人」という社会的アイデンティティが問題となる。英語を話さないといけないと、緊張している様子がよくわかる。すでにデービッドと旧知の間柄である、叔父の文治にとっては「デービッドはん」であり、この人物と「ケーキ職人の神様」という個人誌とを結びつけるのが個人的アイデンティティである。ちなみに Goffman は、名前のことを「アイデンティティペグ」と言っている[1]。

公的アイデンティティは、「いまここ」のコミュニケーションの基盤であり、これと深く結びついている。Sudnow は、その一瞥論の冒頭で、以下のように述べる[8]。

日常に達成されている膨大な数の社会的相互行為にとって、ひとが、互いの行為や場面の特性、カテゴリー上の地位などを「一瞥で (at a glance)」、「理解する」能力は極めて重要なものである。(p. 259)

Sudnow の議論で本論にとって重要な点は2つある。ひとつは、「一瞥で」ということで、じっくりと時間をかけて注視したうえでの「理解」ではないということである。もうひとつは、ひとの「カテゴリー」理解（本論でいう公的アイデンティティ）は、なにをしているところかという行為や場面と不可分であり、同時に「理解」されるということである。

たとえば、歩道から車道へと出てきて、手を突き出して指を立てているひとは、タクシーを拾おうとしている「タクシー客」と理解することができる。

出会いにおいて自分が何者かを提示することも、そのコインの裏側として重要であり、Sudnow はそのような自己呈示を行うタイミングを主題としている。見るひとが「一瞥」するタイミングに合わせる必要があるので[8]。Sacks の成員性カテゴリー化装置論の元となった自殺防止センターへの電話データにおいては、電話をかけてきたひとが、センターに助けを求める有資格者であることを示すために、「だれも頼るひとがない」という発話が着目された[9]⁶。

ある相互行為場面において、ある人が「何者である」かは、その相互行為の成り立ちを左右する。春男は乏しい英語語彙を探って、目の前の「白人」にどう話しかけるかを考えた。南の調査では、バイリンガルの帰国生が、英語で話しているところに日本語しか話さない日本人がやってきて、どのように言語選択をすべきかで大いに迷った経験があると話してくれた[7]。

Sudnow の分析の事例では、通りで知人を見かけても、そのひとが「ウィンドウショッピング」をしているところなら、通りの反対側からわざわざ挨拶をしないという判断につながるとされた。

⁶ この発話がなされる「タイミング」は、会話の最初のほうということになるだろう。電話をかけて、それを継続する資格を主張するものだからだ。

7. アイデンティティ研究と認知科学

本論では、Goffman を元にした4類型を手がかりにひとのアイデンティティと相互行為との関係を見てきた。最後に、「認知科学」はこれらにどうアプローチしているか、あるいはしうるのかを取り上げる。

実は、情報科学的な認知科学がいちばん関係するのは、4類型のうちここまであまり取り上げてこなかった公的個人的アイデンティティである。銀行ATMで使用されている指紋認証による本人確認がその例だ。あるひとが、口座所有者の○山△男であることを、登録された指紋パターンといまここで提示されている指紋パターンと照合して「同一人物」であるかを確認するものだからだ。

「私的個人的アイデンティティ」の事例として思い浮かぶのは、記憶障害の例である。是枝裕和監督作品『記憶が失われた時』（1996）の前向き健忘症の患者は、医療事故後に「エピソード記憶」ができなくなり、新しく生まれた実子が、自分の子どもであるということも「記憶」できない。2時間まえに自分がしたこと、言ったことを覚えていないために、「自己」の「斉一性」や「一貫性（継続性）」の感覚を持てずにいる。記憶メカニズムという「認知科学」の中核的な対象に関わっている。

上述の2つの個人的アイデンティティは、現在の認知科学からのアプローチを想起しやすいものであるのとは対照的に、社会的カテゴリーとの同定である社会的アイデンティティは、認知科学からのアプローチがすぐには思いつかない。

ひとつ考えられるのは、行為者カテゴリーとしての社会的アイデンティティの例である。たとえば、選挙演説では、候補者の身辺警護のためにSPが観衆の動きを注視している。そういったなかに、不審な動きをする者がいれば、それを見つけて反応するということが必要だろう。

これを、カメラで撮影して行うという場合、「不審な動き」とは、たとえば、ポケットから拳銃を取り出す動きがあるだろう。この動きをする者を「狙撃者」あるいは「暗殺者」として同定しているということができるだろう。しかし、「赤ちゃんが泣いた」、「そのお母さんが抱き上げた」とカテゴリー化して、定式化し、「記述」する[10]にはどんな情報処理が必要なのだろうか。

そして、私的社会的アイデンティティがある。たとえば、「意思決定」にその可能性が感じられる。16歳

のAが、将来アメリカの大学に行こうとするのか、それとも日本の大学に進むのか。アメリカで「日本人」として生きていくには、専門職に就くことが「有利」とされているために、医師になることを目指すのか。あるいは、ほかを専攻するのか。結婚相手は、日本人、あるいは日系人、あるいは日本文化とは無縁の「アメリカ人」とするのか。人生にはこういった選択、意思決定がみちあふれている。

南の恩師 Aaron Cicourel 博士はその論文集を『認知社会学』と題した[11]。「機能的成員性（functional membership）」という概念を提唱した Ward H. Goodenough は認知人類学者であった[12]。人文社会科学の関心のひとつであるアイデンティティ研究が認知科学において進められることを願って結びとする。

参考文献

- [1] Goffman, E., (1963) *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*, Prentice-Hall.
- [2] 南 保輔, (1998) "「日本人」という公的社会的アイデンティティ：帰国子女の「日本人」意識を考えるために", 成城文藝, No. 161, pp. 160-148.
- [3] 南 保輔, (2010) "アメリカの「日本人」高校生の文化的アイデンティティと社会化経験：コミュニケーションエコロジー調査から", コミュニケーション紀要, No. 21, pp. 1-34.
- [4] Erikson, E. H., (1959) *Identity and Life Cycle*, International Universities Press.
- [5] Erikson, E. H., (1963) *Childhood and society*, Norton.
- [6] 南 保輔, (2000) 海外帰国子女のアイデンティティ：生活経験と通文化的人間形成, 東信堂.
- [7] Minami, Y., (2007) "Discourse of change among young Japanese sojourners: A case of 'I've changed.'", The Seijo Bungei, No. 200, pp. 278-256.
- [8] Sudnow, D., (1972) "Temporal parameters of interpersonal observation," *Studies in social interaction*, Free Press, pp. 259-279.
- [9] Sacks, H., (1972) "An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology," *Studies in social interaction*, Free Press, pp. 31-74.
- [10] Sacks, H. (1972) "On the analyzability of stories by children", *Directions in Sociolinguistics*, Holt, pp. 325-345.
- [11] Cicourel, A. V., (1974) *Cognitive Sociology: Language and Meaning in Social Interaction*, Free Press.
- [12] Goodenough, W. H., (1957) "Cultural anthropology and linguistics", *Report of the Seventh Annual Round Table Meeting in Linguistics and Language Study*, Georgetown University, pp. 167-173.